

## 印象12編 —2021年9月の総評に代えて

○林 桂○

\*今回は、取り上げた作者が比較的散った。取り上げた作品が、何か一色のように感じられて、一人の作者の作品を大量に採用してしまったかと反省しながらの確認で、逆の答えが出た。如何に作者は解らないものか思い知った。

レベルが向上し、選が難しくなっている。嬉しいことには違いない。

●まちりこ●(埼玉県)

開かずの踏切で  
遮断機が上がるのを  
待つ間  
思い出す  
水族館の暗がり

\*なぜ「水族館の暗がり」を思い出したのか。作者にも解らないに違いない。待ち時間が長かったからであり、その間考えることは定まっていなかったからでもある。近いか遠いかは解らないが、過去の一コマが脈絡なく蘇ってきたのであろう。しかし、「水族館の暗がり」である。自ずから、作者の心の様を反映している。

●猫谷圭希●(広島県)

「はなじ」より「はなぢ」の方が  
痛そうだ布団の中で考えている

\*「ぢじずづ」の四つ仮名は、現代仮名遣いの矛盾である。「鼻血」(はなぢ)の連濁だから「はなぢ」が正解のはずなのに「はなじ」である。表現の主を「じず」に絞ってしまったための失敗である。助詞の「は」「を」(これはそのまま残した)と合わせて、小学生が学習で混乱するもとだが、小学生が混乱しているのではなく、仮名遣いが混乱している。眠れないのか、起きられないか、布団の中でのつれづれに、ふと気づくのである。

知人の娘さんが、あるとき「地面」(ちめん)なのになぜ「ぢめん」でなく「じめめん」か聞いてきたという。無理筋の大人より聡明である。

●猫谷圭希●(広島県)

母さんは

『死んだら海に撒いて』って

言うけど私は少し寂しい

\*樹木葬や海への散骨が行われている。墓標を持たないという選択である。経済的な問題や子孫の負担への配慮があるだろう。しかし、墓標は本人よりも、残された者のものである。寄る辺の形はいろいろあるだろうが、思い偲ぶための何かし

らの形が欲しいのが残された者の思いだろう。それが多く墓標の形に表現されてきたのだ。

子の寂しいのは当然だろうが、「母」の孤独の深さを思わずにはいられない。

ちなみに、アメリカがビン・ラーディンを殺害した後、水葬にしたのは信者に寄る辺となる墓標を持たせないためだったと聞く。

● 藤色 ● (京都府)

雨の日の唐揚げのじゅわ

\*「じゅわ」が最高。

● 白野 ● (新潟県)

肺呼吸だからいけないのか  
きみは水族館で私を見ない

\*水族館でのデートだろうか。「きみ」は鰓呼吸の魚類に夢中になって、肺呼吸の「私」を顧みない。顧みないのに肺呼吸が理由のはずもないが、視点にユーモアがあって、まだ子どもっぽい「きみ」の姿が彷彿とする。

● ごんし ● (愛知県)

食物連鎖の頂点にしては  
幸せが少ないように思う

\* 人類は食物連鎖の頂点であるが、人類個々の幸せを担保するものではない。自分にはもう少し幸福感はあってもいいのではないかという思いの根拠が「食物連鎖の頂点」である。もちろん、それは根拠がないに等しい。

● 長谷川 柊香 ● (宮城県)

酔った父は月まで水を買いに行く

\* 「月まで水を」に感服。酔った千鳥足の「父」の思いは、軽く月まで到達しそうである。今や酔い覚ましの水を求めて父はどこまでも行きそうなのである。

● 加藤 美紀 ● (愛知県)

台風の前に野菜を収穫し  
送ったと笑う独居の姑

\* 出荷用の野菜ではなく、小さな畑でつくる自家用の野菜であろう。しかし、それは自分のためというよりは、離れて暮らす家族のためのものである。「台風の前」「独居の姑」が心に響く。一人で暮らしながら、独りでは暮らしていないのだ。

● うずたろう ● (埼玉県)

花びらの点々とする歩道橋  
鼓膜が少し腫れぼったい日

\* 2行目の自身の身体への省察が目を惹く。自身の身体感覚に敏感に反応しながら生活している人がいる。歩道橋には桜の花びらが散り敷いている。風を感じやすく、視界の広がる中で、自身の身体感覚が冴え始める。

● 細村星一郎 ● (東京都)

水になるまでの愉悦に桃がある

\* 最終形は水。そこに向かって変化してゆく過程の中に桃がある。そこは「愉悦」の最高を感じることができるところなのだ。果物の中でも「桃」が持っている質感を言い止めているだろう。

● 折田日々希 ● (神奈川県)

コーヒーの

ぬるさで感じるてのひらに

思い出す昼の

深海のねむさ

\* 温くなった珈琲カップを掌で包み込むようにもって、その温かさを感じている。まったりとした時間は、「深海のねむさ」を誘うようだ。この比喩のよろしさ。

● 加藤美紀 ● (愛知県)

きっちりとレシピ通りに

調理する

## 娘のカレーは肉がぜいたく

\*料理を始めたばかりの小学生か中学生くらいの「娘」さん。レシピ通りに作る以外の方法も経験もないので、理科の実験のように正確に調理する。できあがったカレーは、いつも母(たぶん)が作るカレーより肉の多い贅沢なもの。母のカレーは肉を節約していたことがばれてしまう。致し方なしというところか。微苦笑の母が思い浮かぶ。